じっきょう
商業教育資料 No.93 通巻381号

未来の人材を育てる商業教育

東洋大学経営企画本部事務室　参与
川合　正（前　京北学園白山高等学校学校長）

1．商業高校生たちの悩み

2001年，中学校，普通科高校，商業科高校３校の学校長に就任し，生徒たちと向き合った時，商業生たちの抱える大きな劣等感に衝撃を受けた。併設されている普通科高校との制服の違いはネクタイと襟章だけであったのだが，商業生たちが，登校時校門の前でネクタイを結び，帰る時校門でネクタイと襟章を外して帰っていく姿に何度も遭遇し，子供たちの心情に思いを馳せた。

また，２年生のY.Y君の「僕は小学校時代は，大嫌いです。小学校，中学校の時，先生にクズと言われていたからです。特に中学校の先生は，人を勉強の成績だけで全て決めようとするので，とても嫌でした。」と書き出した作文を担任から見せられた時のショックは忘れられない。Y.Y君は，高校入学後いい仲間に恵まれ，勉強にも意欲を示し，「僕が大学生になれたなんて信じられない」と驚喜して校長室に駆け込んできたことを昨日のことのように思い出す。彼らの高校への進学は，本来希望した学校ではなく，第二志望，第三志望，中には行ける学校がなくなり，泣く泣く本校に入学してきた生徒もいるのであろう。だとすれば，勉強，勉強と言う前に，私学の商業高校では，やるべきことがあるのではないかという大きな使命を私は感じた。

「教育では敗者はつくらない」というのが，教育現場の鉄則である。いい点数を取る，いい高校に入る，模擬試験で優秀である，などという一元的な価値観だけで人を評価するなどもってのほかであり，高校という場で貼られたラベルが一生つきまとうなど有ってはならないことである。

2．私立学校での商業教育のニーズ

1908（明治41）年，井上円了（現東洋大学，現京北中学・高等学校創設者）の後を継いだ湯本武比古は，ドイツに４年間留学している時，その商人のもつ道徳性の高さに触発され，日本の商業道徳教育の必要性を感じ京北実業学校を設立した。その後，105年の時を刻んで多くの最先端の企業人，商業人，芸術家などを輩出してきた。その存在価値は大きかったと言える。

その前後に，創設された多くの私立学校が「商

もくじ

未来の人材を育てる商業教育 …… 1
資本は純資産に置き換わったのか？ …… 5
商業教育の授業改善について …… 9
発想力を養うプログラミング教育について …… 13
新検定「ビジネスコミュニケーション検定試験」について …… 17
指宿商業高校における実践型ビジネス教育の展開 …… 19
平成24年度 海外商業教育事情視察 報告 …… 21
諸説あるプログラミング言語「Java」の名称の由来について …… 22
千葉商科大学教育研究会報告 …… 23

業」学校としてスタートしたことを考えても，この時代に商業高校（実業高校）は重要なミッションをもった学校であった。しかし，「商業」という言葉には，「士農工商」の時代から，低い評価があったことも事実である。あの東京高等商業学校（後の一橋大学）でさえも「財政面の支援を得ることは並大抵ではなく，同時にその位置づけに対する低い評価も常について回った」ことが，島田昌和氏の論文でも触れられている。（2009 年『経営論集第 19 巻』）

完成教育（上級学校への進学ではなく，その学校を卒業後ただちに社会に出て働くことを目標とする）の必要性がある中，従来からの呪縛と大学進学が当たり前の風潮とに捉われ，子どもたちも保護者も「商業高校進学」という言葉に対するマイナスイメージがついてまわるなら，経営あってこその私学が「商業教育」から撤退するのはいたしかたないことであったとも言える。

３．生徒の自尊心復活と学ぶことの喜びを体験させる試み

都内で，商業高校を標榜し募集している私立学校は，現在８校になった（240 校中）。そのような状況の中，どんなアクションがとれるのか，この 10 年間に本校で取り組んだ，生徒に自尊心を持たせ，社会に出ても積極的に活動する力を養うための教育として取り上げた内容を整理すると以下の通りである。

Ⅰ　校名の変更

2002 年「京北商業高等学校」→「京北学園白山高等学校」

Ⅱ　制服の一部変更

ネクタイと制服の生地とイメージを変える。

Ⅲ　本物の教育の体験

千葉大学教育学部教授の「心理学」「物理学」の授業体験など。

Ⅳ　プロジェクト・ベース学習の導入

各自の一番興味のあることを徹底的に調べ，皆の前でプレゼンテーションする。

Ⅴ　課題研究の活用

経済を中心に国語・社会・英語の横断的な学習

Ⅵ　高大連携での出張授業

環境，ビジネス，食育，グローバル化，生きる，キャリアなどの授業

Ⅶ　留学生との交流（Let`s Chat in English!）

東洋大学の留学生を招き，交流を定期的に深める

Ⅷ　資格取得

「社会人に求められる教養を培う」ということで学習意欲を高める

などの取り組みを教員たちの自主的な授業改革としてゆるやかに取り入れていった。ちょうど，この実践を始める 2001 年，幸運なことに「第１回日経ストックリーグ」（中・高・大生がバーチャルな株式投資を通して日本経済の再生案を提言する大会）で，２年生の生徒たちが並みいる強豪校を抑え最優秀賞を獲得し，ニューヨークウォール街に招待され，大きくメディアでも取り上げられたことは，学校全体の活気と共に，生徒たちに「俺たちでもやれば，できる」という自信を持たせる良いきっかけになった。

４．授業実践①　―「本物の授業」の体験―

教師たちは日々，生徒に興味を持たせる授業を工夫して教壇に立っている。しかし，毎年教えていると，「こんな難しいことは教えてもこの子たちには無理だ」「試験で合格点を取れればいいや」などとその学校の文化に合わせて，先入観で判断したり，事なかれ主義に陥っていることも多い。そのような状況を打破するため，2001 年９月に行った「物理の授業」の一幕をライブ形式で再現しておきたい。授業者は麻柄啓一千葉大学教授（当時。現在は早稲田大学教授）。対象は，京北商業高校１年Ａ組 30 名であった。

「さて，隣の人と２人組になってください。今からこんなもの（画用紙を５センチ幅に切り，真中に四角の紙で作ったカゴをつけてある）を配ります。本を２冊ぐらい両方の下に入れて「橋」を作ってください。そして，真ん中のカゴに金貨を入れてみてください。どのくらい橋が曲がらないで乗りますか」

「すぐ，ダメになっちゃうよー」「10 円しか乗らない」などの声。どのグループも必死で挑戦している。「みんな，いろいろ考えて工夫してくださいよ」と声がかかると，生徒たちは隣の仲間と相談して橋を強くする工夫に取りかかった。先生は，机間を歩き回りながら声をかけていく。

「紙を逆さにして（カゴを）橋脚にしたのか」「両脇をさらに本で押さえて補強したんだね」「紙を三角に折ったんだな」「あれ，みんな見て見てこのグループでは，こんな形（アーチ型）にしているよ。どう一杯金貨が乗る？」「はい乗ります」「すごい

ねー，みんなもこんな型にしてみてごらん」

「これは，アーチの形だね。アーチにすると強くなることが分かったけど，実際の生活の中で，こんな [アーチ型] を利用しているものを知っていますか。」（中略）

「さて，アーチの形が圧力に強いと分かったんだけど，ここにある電球もアーチの形だね。じゃーこの上に乗っても割れないぐらい強いんだろうか実験してみようよ」と授業は進む。全生徒が真剣な目つきで授業に引き込まれて，日常生活の中でアーチ型でできているものが多くあることに気づくとともに，授業が現実とかけ離れたものではなく，生活に密着していることを自然に学んでいった。生徒たちが真剣に授業に参加する様子に触れ，授業を見直すきっかけになった先生も多かった。

５．授業実践②　―プロジェクト・ベース学習―

本校でのプロジェクト・ベース学習は 2002（平成 14）年９月９日の千葉大学教育学部上杉賢士教授による解説と企画書作成の２時間の授業から始まった（以降現在まで毎年，生徒への上杉教授の解説から授業は始まっている）。その後，教授と先生方との打ち合わせをして，学年所属担任団と教科が各授業の一部やホームルーム，放課後などを利用して取り組み，２月か３月に「プロジェクト・ベース学習プレゼンテーション」が生徒・教師・父母・上杉先生と研究生，教育関係者及び報道陣の前で行われる。当初は，国語４，商業１，情報処理５，社会４，ホームルーム５の 19 時間を当て，その他放課後や休み時間，家庭学習まで加えるとかなりの時間を生徒たちは費やしてきた。プレゼンテーションの前日などは，夜 11 時過ぎまで，先生と生徒がプロジェクターを使い楽しそうに予行演習をしている姿が，今や白山高等学校の三学期末の風物詩になっている。

プロジェクト・ベース学習とは，大正期の日本に導入され，戦後の新教育運動にも連なる自主学習の一形態である。その後，系統学習の台頭とともに姿を消しつつあったが，ミネソタ・ニューカントリースクールによって 21 世紀の学びに合うように改良された。自分の最も興味や関心のあるテーマについて，価値・ゴール・プロセスの検討などを含む企画を立て，それに沿ってテーマ追究を行う。このプロジェクト・ベース学習によって生徒たちは，自分の可能性を確信し，将来の進路への展望や希望を抱くことも容易にできるようになっていく。実際にこの学習を導入してから生徒も教師も自信を持ち，各自の特長を捉え，キャリア学習の一翼を担う大切な授業になっている。2011 年のプレゼンテーションに参加いただいた方からは，

■松尾友矩先生（東洋大学常務理事，前学長）
３月に結果発表のあった東洋大学主催の「地域の底力『若者の論文』」では，京北学園白山高等学校の生徒たちから多くの論文が寄せられました。なぜ，こんなにたくさんの生徒たちが自らの意見をはっきり言えるのだろうかと疑問に思っていました。今日の発表を見て，PBL を通して，自らを表現できるようになっていたのだということがわかりました。これからの皆さんに期待しています。

■上杉賢士先生（千葉大教育学部教授）
発表の内容が多岐にわたっており，非常に興味深く素晴らしい発表でした。大学の研究生が行うようなレベルの発表内容や，なるほどこういう切り替えのし方をしてきたかと，驚かされる発表もあり，大いに楽しませてもらいました。人の発表を聴くというのも，勉強の一つです。みなさんにとって良い勉強になったことでしょう。

などのコメントをいただいた。「君たちは自分の意見をはっきり言える・自らを表現できる」「大学の研究生と同等の発表内容」というコメントなどは，生徒たちの自尊心，自信につながっていったことは間違いない。実際に生徒たちの大学進学率は，10 年前 15 パーセントぐらいだったが，現在では目的を持って 70 パーセント以上の生徒が大学進学を達成するようになっている。

６．jug and mug 教育からの脱出

「教職員（水差し jug）は，知的な事実に基づく知識を持っており，その知識を注ぎ入れることができるように学生を，受身の受取人（コップ mug）にする結果になっている」とカール・ロジャースは『人間中心の教師』（岩崎学術出版社 1984）で指摘していたが，日本の従来の教育もこの「jug and mug 教育」といわれるものが主流であったと言える。

「勉強とは，つらいもの」「大学進学まで我慢してやるもの」「楽しいわけはない」などと誤った価値観で語られることも多かった。先に引用したロジャ

ースの本には「jugには，“刑務所”mugには“背後から襲う”という意味がそれぞれあります」（伊藤博監訳）と訳者注が加えられている。勉強が得意でないものにとっては，学校は刑務所と同じであったとすれば，こんなに悲しいことはない。

しかし，本校での実践を通して明確になったことは，子どもたちには誰でも知識欲があり，授業の質，内容，システムを変えるだけで，大いに学ぶ意欲を喚起することができるということであった。我々教員は，ますます授業力を磨く必要があると言えそうだ。

さらに，2011.3.11.の東北地方太平洋沖地震に始まる東日本大震災とそれに続く福島原発の事故は，国家・政府・経済・教育・科学など今まで信じていたものを根底から揺さぶる結果になった。教育でも，授けられた知識を活用し，マニュアルに沿って行動しているだけでは，各自の「いのち」を守れない事実が突き付けられた。

文部科学大臣発言も今までの「生きる力」という標語から「生きぬく力」という表現に変わっていることでも分かる通り，グローバル社会の中で未来を背負う子どもたちの教育には，大きな変換が必要になっていることは間違いのないことのようである。

７．商業教育に期待すること

今回の新学習指導要領の改革の目玉に「言語活動の充実」がある。「各教科・科目等の指導に当たっては，生徒の思考力，判断力，表現力等をはぐくむ観点から，基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに，言語に対する関心や理解を深め，言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え，生徒の言語活動を充実すること。」（第一章　総則　第５款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項）とされている。具体例として文部科学省の配布資料「例えばこんな言語活動で授業改善」には，

① 考えを深める場面で

一斉授業だけでなく → ペアで意見を交換する，付箋を使って話し合う，ホワイトボードを使って話し合う

※生徒一人一人が自分の考えをもち，他者との考えとの共通点や相違点を意識しながら考えをふかめていくような言語活動を充実しましょう。

② 発表の場面で

先生が説明するだけでなく → 生徒が説明する，製作物を使って発表する（ポスターセッション），立場を決めて討論する

※生徒が自分でまとめた事柄などについて説明したり，相手の立場や考えをお互いに尊重して話し合ったりするような言語活動を充実しましょう。

③ 書く場面で

板書をノートに写すだけではなく → レポートをまとめる，新聞にまとめる，ＩＣＴを活用する

※生徒が集めた情報を整理・分析し，論理的にまとめて表現するような言語活動を充実しましょう。

とイラスト入りで分かりやすく説明をしているパンフレットを眺めていると，全国の商業教育で行われてきた地域興し・商品開発，売買・広告作り・観光・インターンシップなどの優れた教育実践にはるかに及ばない内容である。毎年，各地の商研大会で発表されているものにこれらの要素が欠けているものなど一つもないことは一目瞭然である。

文部科学省が推奨し各大学で研究，研修，実践が始まっているアクティブラーニングとは「教師が一方的に行う授業スタイルではなく，生徒の積極的な参加を促す授業・学習方法」という授業実践全てを指す言葉である。今後の社会を担う生徒たちに求められる能動的な問題理解能力を育てる教育として注目されている。これは，商業教育で積極的に取り扱われてきた授業形態でもある。

今後一層グローバル化が進む中，従前通り大学進学を高校教育の最終目標とするような時代は終焉を迎えたといえる。新指導要領の完全実施で教育の転回点と言える2013年，未来を担う子どもたちが国際社会で生き抜いていく力を蓄積するために，商業教育が今まで積み上げてきた実践に注目が集まるとともに，商業高校の優れた実践をさらに積み上げ，全国の教育関係者に積極的に発信して行って欲しいと願っている。